

## ラヴェル／管弦楽のための舞踊詩「ラ・ヴァルス」

1920年に初演されたモーリス・ラヴェル（1875-1937）の舞踊詩「ラ・ヴァルス」はいにしへのウィーンをテーマにした小品である。楽譜の冒頭には「渦巻く雲の切れ目からワルツを踊る数組のカップルがわずかにみえる。雲はしだいに晴れてゆき、旋回する人々でいっぱいの大広間がみえてくる。舞台はやがて明るくなり、シャンデリアはフォルティッシモで輝く。1855年ごろの宮廷」と記されている。ウィーンがオーストリア＝ハンガリー帝国の首都だった華やかな時代の音風景だ。ワルツが「ウィーンの音楽」として知られるようになったのは19世紀の前半で、当時から19世紀末にいたるまで、ウィーンでは誰もが陽気で快活な3拍子に酔いしれた。帝国に暗雲がたちこめ、危機が深刻になるにつれて、恐ろしい運命を忘れようと、人々はくるくると回って踊り、心を羽のごとく軽やかに遊ばせたのである。ワルツの主題が切れ切れに導入される序奏で始まり、7つの部分からなる前半と、激しい高揚へ向けてクレッシェンドしていく後半から構成される。歪んだワルツは、ウィーンの人々が決して逃れることのできなかった宿命の旋回を繰り返すのである。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

### 楽器編成

フルート3（ピッコロ持ち替え1）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バス・クラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、スネアドラム、バスドラム、タンバリン、トライアングル、シンバル、カステネット、クロタム、タムタム、グロッケンシュピール、ハープ2、弦五部 ※スコア上の表記